

……ぐうう。

また鳴った。俺の腹の奥で、いや、もっと下の方で。欲しくてたまらないのは血でも肉でもなく、あの甘ったるい濃い匂い——精液だ。

夜風に乗って街を飛び回りながら、俺は舌を出して空気を味わう。

汗、酒、排気ガス。ぜんぶ違う。俺の喉を焼いてくるほどの“旨い匂い”はどこだ。

ふと、鼻腔の奥をくすぐる刺激に羽ばたきが止まった。

……これだ。

とろけそうに甘くて、それでいて雄の匂いが濃い。舌の根っこから熱がせり上がる。俺は匂いを辿り、ベランダに降り立った。

窓の隙間から中を覗くと、部屋は暗い。けれどベッドの上に横たわる男の姿がはっきり見えた。

若い。大学生だな。無防備に眠り込んで、かすかに寝息を立てている。

視線が自然に下へ落ちた瞬間、俺の喉が鳴った。

シーツを押し上げるほどの膨らみ。

寝ているくせに、いや、寝ているからこそか——ズボンの下からはち切れそうに勃起上がったちんぽが、俺を誘っていた。

「ん～～……♡」

思わず声が漏れる。舌の奥からじゅるりと唾液が溢れ出し、

口の端を伝って顎へ垂れた。

(やっぱ……♡ こんなデカいの、久しぶりに嗅いだ……♡
♡)

シート越しにでも分かる。

熱くて、硬くて、脈打ってる。俺の腹はぎゅるぎゅる煮え立ち、腰の奥がじんじん疼き出す。

近づけば近づくほど匂いが濃くなる。雄の匂い、精の匂い、まだ放たれてもいないのに空気に混じって漂っている。

たまらなくて、俺は窓の隙間からぬるりと滑り込んだ。

「っ、はぁ……♡」

ベッド脇にしゃがみ込んで見下ろす。

大学生はまだ眠ったまま。

布地をぐっと押し上げ、先端の形まで分かる勃起。シートに擦れて先走りでも滲ませてるんじゃないかってくらい湿った匂いが濃い。

俺の口が勝手に開いた。

唾液がぽたぽた垂れる。喉が鳴る。

(喰いてえ……♡ あれひと口で、ぜったい腹いっぱいになれる……♡♡)

ぐい、と下着を下ろした瞬間。

ボロン♡

ぶるん♡と揺れて、極悪ちんぽが飛び出した。

先端まで真っ赤に腫れ上がって、どくん♡どくん♡熱く脈打ってる。俺が知ってる限り、ダントツででかい。

皮を弾いた根元からはびっしり血管が浮いて、すでにとろ〜ん♡とカウパーを垂らしていた。

「っはぁ……♡ やっぱ……♡♡」

喉が鳴る。

じゅる♡じゅる♡と唾液が勝手に溢れて、口の端から胸までびちゃびちゃ濡らす。

目の前の肉が大きすぎて、見てるだけで腹がぎゅるぎゅる煮え立った。

「こんなん反則……♡♡ ひと口でイかせてくれそうな匂い出して……♡」

ぺろ♡ぺろ♡と舌を伸ばして先っぽを舐めた。

透明な液が甘じょっぱくて、ぬるぬる♡舌に絡みつく。

唇を押し当ててちゅる♡ちゅる♡吸い上げると、また新しい汁がびゅくっ♡と飛び出す。

「んっ♡♡ うつま……♡♡ 止まんねえ……♡」

裏筋をこりこり舐めるたび、肉棒がびくん♡びくん♡跳ねて俺の口に押しつけてくる。

両手で根元を握りしめて、ぬちゅ♡ぬちゅ♡音を立てながら舐め上げる。

唇の隙間からだらだら♡垂れ落ちるよだれで、首筋も胸も濡れていく。

「っん……♡♡ たまんねえ……♡♡ もっと……もっと喰わせろ……♡♡」

喉の奥で声が掠れる。

ちゅぽ♡じゅぽ♡と肉先を吸りながら、舌をぐりぐり♡絡ませて、俺の空っぽの腹に欲望を流し込む準備をするみたいにしやぶり尽くす。

「じゅる♡じゅる♡……ちゅぽっ♡♡ ん〜〜♡♡♡」

肉棒を根元から舐め上げながら、先端を口いっぱいに入れてちゅる♡ちゅる♡吸い込む。

舌を絡めてぐにゅぐにゅ♡擦りつけるたび、ぬるぬる♡とろとろ♡口の中いっぱい匂いと味が広がって、頭まで痺れそうになる。

「んっ♡♡ やっぱ……♡♡ 喉まで突き上げて……♡♡♡」

どくん♡どくん♡と先端が喉奥を叩くたび、俺の下半身がじんじん♡熱く疼き始めた。

唇で吸い付いているだけなのに、腰の奥が勝手にきゅん♡きゅん♡締まって、下の穴までむずむず♡疼く。

「あ……っ♡♡ 俺の下まで……ジンジンしてきて……♡♡ やっぱ……♡♡♡」

自分の声にすら痺れる。

肉棒をじゅる♡じゅる♡としゃぶりながら、お腹の奥が空っぽのままきゅう♡と縮み上がる。

舐めてるのに、吸ってるのに、欲しいのはもっと奥まで突き込まれる感覚。

「だめ……♡♡ 俺、喰うだけのつもりだったのに……♡♡」

唾液と先走りが混ざり合って、口の周りがぐちゅ♡ぐちゅ♡。
首筋から胸元まで、どろどろ♡じゅるじゅる♡に濡れそぼって、体中が痺れるみたいに熱い。

「ちゅるっ♡ じゅぽ♡ んぐっ♡♡♡ んんんっ♡♡♡」

舌で裏筋をねっとり♡擦り上げるたび、腰の奥がビクビクッ♡と痙攣して、穴がきゅう♡きゅう♡と縮んでしまう。

肉棒をしゃぶればしゃぶるほど、俺の下がヒリヒリ♡ジンジン♡疼き出して、たまらなくなっていく。

「んゝ♡♡ ああっ♡♡♡ やば……♡♡ 口ん中に……どろどろ溢れてきて……♡♡♡」

舌先にまとわりつくのは先っぽから滲み出る透明な汁。
ちゅる♡っと吸い上げると、喉まで甘く痺れて、腹の奥がぐるぐる熱くなる。

「カウパー……♡♡ んくっ♡♡ うま……♡♡♡ 止まんね……♡♡♡」

指先が勝手に下へ伸びる。
ズボン越しに、自分の小さな突起をなぞった瞬間、腰がビクッ♡と跳ねた。

「ひいんっ♡♡ あっ♡♡ クリ……♡♡ 触っただけで……イきそ……♡♡♡」

唇で極悪ちんぽを吸いながら、服越しにクリをこすり上げる。
舌に溢れるカウパーの味と、下から突き上げてくる電流が混ざり合って、全身が蕩けていく。

「んぐっ♡♡ ん うう♡♡♡ あっ♡♡ だめっ♡♡ 俺の方が……先におかしくなる……♡♡♡」

指が布越しにクリを擦るたび、腰が勝手に揺れてしまう。
口に収まりきらない熱を吸いながら、下の方もきゅんきゅん♡疼いて、気持ちよさで息が詰まる。

「んっ♡♡ ああっ♡♡ クリいじりながら……カウパー舐めるとか……♡♡ もう、あほ……♡♡♡」

胸まで赤くなって、目の奥がぼやける。
頭の中はちんぽと快楽だけで埋め尽くされて、もう我慢なんてできない。

「んんっ……♡♡ ……カウパー……美味っ……♡♡」

先端から溢れる汁を舌で吸いながら、俺の指は勝手に下へ動いていた。

ズボンの上から、隠してる突起をなぞる。

布越しに押し当てた指先に、敏感な反応が返ってくる。

自分で分かる。皮に守られたまま、ずっと弄られたこともない俺のクリが、舐めてる快感に釣られてじんじん熱を帯びていく。

「んっ、♡じゅる♡ ……はあ、♡うま……♡」

肉棒をしゃぶりながら、親指で突起を擦る。

舌に絡むカウパーの味と、下から突き上げてくる甘い疼きが混ざり合って、全身が痺れたみたいに蕩けていく。

「はぁっ♡♡ きもち……♡ ちんぽ、ンなのいれたら、俺のおまんこなんて、裂けちまう♡♡♡

んくっ♡♡ 下まで……濡れてきてる……♡♡ 俺の膣口から……じゅわって……♡♡」

ズボンの布地がしっとり濡れていくのが分かる。

自分の愛液で染みが広がっていくなんて、情けないのに、それがまた快感を煽ってくる。

肉棒の匂いと味に酔いながら、自分のクリを弄って愛液を溢れさせる。

大学生はまだ無防備に眠っているというのに、俺だけがぐちゃぐちゃに蕩けて、勝手にメスの身体を晒してしまっていた。

「んんっ……♡♡ あぁ……♡♡ うま……♡♡♡」

極悪ちんぽの先からとろけ落ちるカウパーを舌で受け止めながら、俺の指は勝手に自分の下を探っていた。

布の上から、膨らんだ突起をぐりぐり撫でる。

「ひっ……♡♡ ああんっ♡♡ やば……♡♡♡ これ……やばすぎ……♡♡♡」

一度知ってしまった快感だから、分かる。

抱かれたことなんかないけど、自分で何度もいじってきた俺のクリは、少し触るだけで火がついたみたいに熱くなってしまう。

「はぁっ♡♡ んんっ♡♡ もう……ジンジンして……♡♡♡

クリ触っただけで腰抜けそう……♡♡♡」

肉棒をしゃぶりながら、腰を揺らして擦りつける。

布越しの刺激だけなのに、敏感すぎてビリビリと電流が全身を走り抜けて、目の奥まで白くなった。

「俺……♡♡ オナニーの時より……っ♡♡ やば……♡♡ ちんぽの味と匂いで……余計に……っ♡♡♡」

カウパーを飲み込むたび、喉の奥が甘く痺れて、下の穴まで疼いてしまう。

唇は肉を吸い、舌は汁を舐め取り、指はクリを必死に擦って——もう身体中が快楽で繋がってしまっている。

「だめ……♡♡ 両方一緒にしたら……♡♡ すぐイク……♡♡♡ ほんとにイっちゃう……♡♡♡」

腰をくねらせ、夢中で自分を擦りながら、しゃぶる口は止まらない。

喉奥で脈打つ極悪ちんぽに酔わされながら、俺はオナニーにのめり込んでいった。

「んんっ……♡♡ くる……っ♡♡ 先から……熱いの……溜まってきてる……♡♡♡」

喉の奥にびくんびくんと脈打つのが伝わってくる。

まだ眠ったままの大学生のちんぽが、俺の口の中で勝手に射精の合図を送っている。

「やば……♡♡ もう出る……♡♡ イきそうなんだろ……♡♡♡」

俺は唇をさらに押し込んで、肉棒を深く咥え込んだ。

喉がぐっと押し広げられて、涙が滲む。けれど、それ以上に
身体の奥がきゅんきゅん震えて快感に痺れる。

「はやく……♡♡ はやくイけよ……♡♡ 俺に全部ちょうだい……♡♡♡」

クリを擦る指が止まらない。

自分の下もぐちゅぐちゅに濡れて、腰が勝手に揺れてしまう。
しゃぶりながら、自分でも堪えきれずに喘ぎ声が漏れる。

「はぁっ♡♡ あっ♡♡ イきたいんだろ……♡♡ イけ……♡♡ イけよ……♡♡♡」

ぐっと根元まで咥え込む。

喉奥で跳ねる熱がどくどく膨らんで、もうすぐ爆発しそうに
暴れている。

俺は涙で濡れた目を細めながら、必死に舌を絡め、唇を締め
てせがんだ。

「イけ♡♡ イって♡♡♡ 俺の喉にぶちまけろ♡♡♡」

下のクリも同じリズムで擦りながら、肉棒をしゃぶる動きに
合わせて腰を振る。

自分もイきそうでたまらないのに、口の中の熱が先に爆ぜる
のを待ち焦がれていた。

「んっ♡♡ くるっ♡♡ でる……っ♡♡ あっ……♡♡♡」

根元まで喉に押し込んだ瞬間、熱がどくんと大きく脈打った。
次の瞬間、口の中にびゅるっと弾けて、喉の奥まで叩きつけられる。

「んぐっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ きたっ♡♡♡ でてるっ♡♡♡」

びゅくっ♡びゅくっ♡と次々に進む濃厚な精液。
逃げ場のない喉の奥に流れ込んで、俺は必死に飲み込むしかない。

「はあっ♡♡ んくっ♡♡ ごくっ♡♡♡ うまあ……♡♡♡」

舌にまとわりつくどろどろの味。
熱くて、苦くて、でも甘い。空っぽだった腹の奥がじんじん満たされていく。

「まだ……♡♡ まだ出て……♡♡♡ すご……♡♡♡」

びゅるるっ♡と最後まで吐き出されるのを受け止めながら、俺の指もクリを擦るのをやめられなかった。

口を犯されてる感覚と、下を自分で擦る刺激が重なって、頭の中が真っ白になる。

「だめっ♡♡ 俺も……っ♡♡ イくっ♡♡♡ いっちゃ……♡♡♡」

腰が勝手に突き上がる。

クリを押しつぶす指に全身の快感が集中して、膣口から愛液がじゅわっと溢れ出す。

「ひあっ♡♡♡ あっ♡♡♡ イくッ♡♡♡ んんうッ♡♡♡
♡」

喉に叩き込まれる熱を飲み干しながら、俺は自分の絶頂に震えた。

涙と涎と精液と愛液でぐちゃぐちゃになりながら、ビクビクと何度も痙攣して、完全にトんでしまう。

「はあっ♡……はあああ……♡♡ で、でた……♡♡ すご……♡♡♡」

喉の奥まで精液の熱が残っていて、息を吐くたびに甘い匂いが口の中に広がる。

全身が痺れて、腰から下はまだびくびく震えていた。

「俺……っ♡♡ イきながら……ぜんぶ飲んじまった……♡♡
♡ んくっ……はあ……♡♡」

涙で濡れた睫毛を震わせて見上げると、大学生はまだ眠ったまま。

それなのに俺の口は犯し尽くされて、腹の奥まで熱で満たされている。

「ん……♡♡ まだ……匂い残ってる……♡♡♡」

口の端から零れた精を舌で舐め取りながら、また先端に唇を寄せた。

萎えるどころか、余韻でじんじん熱を帯びている。

「だめだ……♡♡ もっと欲しい……♡♡ まだ舐めたい……♡♡♡」

根元に残るカウパー混じりの汁を啜り、舌で裏筋をなぞる。
喉を突き上げられた時の感覚が忘れられなくて、口の奥まで
押し込んでしまう。

「ん……♡♡ んぐっ……♡♡ はあ……♡♡♡ さっきので
……お腹いっぱいのはずなのに……っ♡♡ まだ欲しい……♡
♡♡」

自分の指はまたクリを探っていた。
絶頂の余韻で敏感になりすぎて、ちょっと擦るだけで全身が
ビクンと跳ねる。

「ひあっ♡♡ あ……♡♡ やめ……♡♡ まだ……敏感で
……♡♡♡ んんっ♡♡♡」

しゃぶる口と、弄る指。
二つの快楽をやめられなくて、俺はまたベッドの上で蕩ける
ように腰を震わせた。

「もっと……♡♡ ん、んんっ♡♡♡ はあ……♡♡ だめ
……もう……♡♡」

喉の奥にまだ熱の残る肉を咥えながら、指でクリを擦って、
俺はぐずぐずに喘いでいた。
欲しくて欲しくてたまらなかったはずなのに、不意に、胸の
奥から怖さがせり上がってくる。

「……ちがう……っ♡♡ やめ……やめなきや……♡♡ 俺
……なにやって……」

起きてしまう前に今日は食事を終えたいと帰らないといけない。
しゃぶる口を離そうとした、その瞬間。
視界がぐるりと反転した。

「——え？」

次に気付いた時には、俺の背中がベッドに押しつけられていた。

驚きに目を見開く俺の視線の先で、眠っているはずだった大学生が上に覆いかぶさっている。

「……おい」

低く掠れた声が耳に落ちる。

汗の匂いと、まだ熱を帯びて硬さを残したちんぽの気配。

さっきまで無防備に眠っていた顔が、すぐ目の前で俺を射抜いていた。

「……なに勝手に、俺のを……舐めてんだ？」

喉が鳴る。

夢中でしゃぶっていたことも、自分のクリを弄っていたことも、全部見られていたんじゃないか——そう思った瞬間、身体の内奥までびりりと痺れが走った。

「ち、ちが……っ♡♡ 俺……っ♡♡」

言い訳しようとしても、声が震えて言葉にならない。
大学生の目が細められて、唇がわずかに歪んだ。

「……起きたら、必死にしゃぶってんだもんな。……どんだけ

欲しかったんだよ」

耳元で囁かれただけで、腰が勝手に浮いてしまった。
もう誤魔化しようもなく、俺は捕まってしまった。

「……で、お前だれだ？」

耳元に落とされた声に、心臓が跳ねた。
大学生の目がまっすぐ俺を射抜いてくる。

「……俺は昨日……お前みたいなやつ、お持ち帰りした覚えねえんだけど」

「っ……♡♡」

声が出ない。

必死に唇を開くのに、喉が熱くて、言葉が形にならない。

大学生の体温が近すぎて、押さえつけられているだけで腰の奥がジンジン疼く。

「おい。黙ってんじゃねえ。……勝手に部屋に入り込んで、俺のちんぽしゃぶって、しかも……自分でイってやがったよな」

「やっ……ち、ちが……っ♡♡ 俺は……っ♡♡」

「ちがう？ じゃあ説明してみろよ」

大学生の指が俺の顎を掴んで、強引に顔を上げさせる。

精液の匂いがまだ口の奥に残っていて、吐息ひとつすら誤魔化せない。

「どう見ても……エロい顔してただろ」

低い声で吐き捨てられて、視線を逸らせなくなった。

誤魔化せるはずがない。

夢中でしゃぶって、オナニーして、勝手に絶頂した姿を、全部見られていたんだから。

「……乳首、ビンビンに立たせて……そんなに犯されたかったのか？」

「ひっ♡♡ あっ♡♡ ち、ちがっ……♡♡」

硬くなった突起を指先で摘ままれた瞬間、腰がガクンと浮いた。

声を必死に飲み込もうとしても、乳首を転がされるたびに背中が反ってしまう。

「やっぱり敏感だな。ほら、こっちも……」

「んっ♡♡♡ やっ……あっ♡♡ だめえ……♡♡♡」

両方同時に捻られて、息が詰まる。

痺れるような快感が胸から下へと突き抜けて、クリまでじんじん疼き出す。

「ちがう……っ♡♡ ちがうんだよ……♡♡ おれは……っ♡♡
♡ お前に犯されたかったんじゃないくて……っ♡♡」

「ほお？」

「……お前の精液が……欲しかっただけで♡♡」

涙混じりに吐き出した瞬間、大学生の唇が歪んだ。

「精液が欲しい？ ……なら、ほら」

ぐっと腰を動かされ、熱くて重たいモノが俺の胸の上に落とされた。

汗ばむ平らな肌を押し潰すようにして、極悪ちんぽが鎮座する。

「ほら、あーん？」

「……っ♡♡♡」

突きつけられた先端が顎を押す。

断れるはずもなく、俺は震える唇を開いてしまった。

「……あーん」

囁かれる声に逆らえず、俺はゆっくり口を開いた。

次の瞬間、先端がぐいと押し込まれて、唇の内側を熱でいっぱいに満たす。

「んっ♡♡ あっ♡♡♡」

胸の上から直に滑り込んでくる重み。

まだ硬さを失っていないちんぽが喉の奥まで突き上げてくる。

「……そうそう。欲しかったんだろ？ 飲ませてやるよ」

「んぐっ♡♡ んんっ♡♡♡ はあっ……♡♡♡」

唇を塞がれたまま、涙が滲む。

胸の乳首はまだ大学生の指に摘ままれていて、ちくちくする刺激が舌の奥の熱と繋がって、身体全体が痺れる。

「ほら、もっと喉の奥まで……ちゃんと咥えろ」

腰を押さえ込まれ、ぐっと根元まで押し込まれた。

喉がきゅうっと押し広げられ、嗚咽と快感が同時にこみ上げ

る。

「んんんっ♡♡♡ んゝっ♡♡♡ はああ♡♡♡」

胸を弄られ、喉を犯され、腰は勝手に跳ねる。

乳首が敏感に立ち上がっているのを摘ままれたまま、俺はただ口いっぱいの熱に縋るしかなかった。

「んゝっ♡♡ あっ♡♡♡ やっ……でかつ♡♡♡」

喉の奥までぐぐっと突き入れられて、視界が揺れる。

涙がじわっと滲んで、顎からよだれが垂れた。

「はは……♡ 欲しかったんだろ？ ほら、もっと喉で咥えろ」

「んんんっ♡♡♡ んぐっ♡♡♡ あゝ ああっ♡♡♡」

乳首はまだ摘ままれたまま。

ちゅくちゅくされながら喉まで突かれると、胸から腰まで全部ビリビリ痺れて、クリが勝手にジンジン疼き出す。

「んっ♡♡ やばっ♡♡♡ 乳首っ♡♡ 乳首いじられながらちんぽ咥えさせられるの、やばいっ♡♡♡」

「んな事言って、やっぱ犯されたかったんじゃねえの？」

「ちがっ♡♡ ちがうのっ♡♡♡ 俺は……精液欲しかっただけで……♡♡♡」

「じゃあ、ちゃんと飲めよ」

腰を押さえつけられて、どぶっ♡と根元まで突き込まれる。

喉がギチギチ広げられて、声にならない喘ぎが溢れた。

「んんんっ♡♡♡」

胸をきゅうっと摘ままれながら、喉を突き上げられて、もう理性なんて全部溶けていく。

「……もっと喉、開けよ」

ぐいっと頭を押さえ込まれ、熱が一気に奥まで突き込まれた。喉の奥でぐぐぐっと広がって、空気の道が塞がれる。

「ん` ぐっ♡♡♡ んんんっ♡♡♡」

声が出せない。

喉の内側いっぱい、極悪ちんぽが詰め込まれて、舌の上から奥までぜんぶ熱に支配されてる。

——ああ……♡♡ 入ってきてる……♡♡ やば……♡♡ 奥まで突かれて……頭の中までチンポでいっぱい……♡♡♡

涙が勝手に滲んで、頬を伝って落ちていく。

苦しいはずなのに、なぜか身体の奥がとろとろに蕩けて、心臓まで気持ちよさで痙攣してる。

——もうダメだ……♡♡ 考えるの、むずかしい……♡♡ ただ奥まで欲しい……もっと突いてほしい……♡♡♡

「そうそう、ちゃんと啜えられてんじゃん」

低い声が頭の奥に響いて、全身がまた跳ねる。

言葉だけで腰の奥まで痺れて、下のクリがきゅうんと縮む。

——褒められた……♡♡ 俺、褒められてる……♡♡ バカみたいに啜えてるだけなのに……それが嬉しい……♡♡♡

「まだ奥まで入んだろ……もっと開けろ」

さらに腰を押し込まれ、喉の奥がごりっと擦られる。

苦しい、でも気持ちいい。矛盾した感覚が脳を痺れさせて、理性が全部溶けていく。

——やば……♡♡ ほんとに頭おかしくなる……♡♡ ちんぽで喉壊されてんの……嬉しいって思ってる……♡♡♡

涎がだらだらと口の端から溢れて、顎から胸へと滴る。

乳首を摘ままれたままだから、胸から腰まで電流みたいに繋がって、身体がビクビク震えて止まらない。

——これ……犯されてる……♡♡ でも、やめられない……♡♡♡
♡ もっと欲しい……♡♡♡

「おら、喉の奥もっと締めろって」

「ん`ん`っ♡♡♡ んんんっ♡♡♡」

奥を擦られながら泣き声を漏らす。

話せない、でも心は勝手に叫んでる。

——もう俺……奥まで啜えるメスになってる……♡♡♡ ああ……気持ちいい……♡♡♡

「ん`ぐっ♡♡ ん`ん`ん`っ♡♡♡」

根元まで喉に突き込まれたまま、逃げ場なく喉奥を擦られる。

息もできないのに、舌の上から奥まで詰め込まれて、全身が痺れるように気持ちいい。

その時——

「ほら、乳首……こんなに立ってんじゃねえか」

硬く尖った突起を指でつままれた。

キュッとひねられた瞬間、喉の奥がぎゅうっと勝手に締まる。

「んぶっ♡♡♡ んんんんっ♡♡♡」

奥を咥え込んだまま喉で強く締めつけてしまい、大学生の腰がびくりと跳ねる。

「……はは。喉で咥え込みながら、乳首いじられたら勝手に締めるのかよ。……気持ちよすぎるわ」

摘ままれて、捻られて、喉の奥まで突かれて——快感が胸から喉に直通してくる。

大学生が面白がるように腰をぐっと押し込んでくるたび、頭の奥まで突かれて視界が白く弾けた。

「ん` ぐっ♡♡♡ あっ♡♡♡ んんんっ♡♡♡」

乳首をきゅつきゅっと摘まれるたびに、喉奥が勝手に収縮してしまう。

その動きに合わせて腰が前後に振られて、喉の奥が何度も突き上げられた。

「これ、癖になるな」

低い声と一緒に、また乳首をぎゅっと引っ張られる。

反射的に喉がきゅうっと絞まって、俺の口は奥までいっぱい
に押し広げられた。

「んぐっ♡♡♡ んんんんっ♡♡♡ はああ♡♡♡」

涎が止まらない。

喉を突かれ、乳首を弄られるたびに、勝手にきゅんきゅんと
奥を締めつけてしまう。

その度に大学生の腰が深く突き込んでくるから、もう快感が
途切れなくて、全身が痺れて震え続けた。

「……欲しいなら、ちゃんと全部飲めよ」

低く落とされた声の直後、喉の奥でびくんと大きな脈動。

次の瞬間、熱いのがどろりと弾けて流れ込んできた。

「ん んんんっ♡♡♡ んぐっ♡♡♡ あっ♡♡♡」

勢いよく吐き出された精液が、喉の奥を叩きつける。

苦しいはずなのに、全身が痺れて震え、快感に変わってしま
う。

「……そうそう、そのまま……喉で受け止めろ」

びゅくっ、びゅるるっと次々に放たれる熱。

口の中いっぱいに溜まって、舌の上でどろどろに広がる。

「んぐっ♡♡♡ ごくっ♡♡♡ んんっ♡♡♡ はああっ♡♡♡
♡」

必死に飲み込むたび、喉がきゅうっと収縮する。
乳首を摘ままれたままだから、そのたび奥まで締めつけてしまい、さらに吐き出される。

「まだだ、ほら……最後まで……」

どぶっ、どぶっ、と深く突き込まれた状態で、残りを全部流し込まれる。
喉も舌も胃の奥まで、大学生の熱で満たされていく。

「……そうだ。ちゃんと飲めたな」

口の端から垂れそうになるのを必死に啜り上げ、俺はぐったりと胸を上下させた。
涙と涎と精液にぐちゃぐちゃに濡れた顔で、まだ喉の奥に残る余熱に痺れながら。

「ん……っ♡♡ はぁ……♡♡♡ ごく、ごく……っ♡♡」

最後の一滴まで喉に流し込んで、俺はぐったりとベッドに沈んだ。

喉の奥まで精液の熱が広がって、頭がぼんやりする。
なのに、口の端からこぼれそうになるのを舌で追いかけてしまう自分が情けない。

——まだ欲しい……♡♡

——もっと飲みたい……♡♡

自分で止められない渇きが、全身から滲み出していた。

「……欲しがりだな」

大学生の声にびくりと肩が揺れる。

トロトロに蕩けきった俺の顔を見下ろしながら、彼はにやりと笑った。

「口はもう満足したか？ ……じゃあ次はこっちで飲ませてやるよ」

「え……っ♡♡」

そう言って伸びてきた手が、俺の下腹を撫でる。

布越しにじっとり濡れているそこへ指先が触れた瞬間、全身が跳ねた。

「ひあっ♡♡♡ あっ♡♡ やっ……♡♡♡」

敏感に疼いていた穴の入口をなぞられる。

オナニーで散々いじってきた場所だからこそ、少し擦られただけでビリビリと快感が弾ける。

「……ほら、もう濡れてんじゃねえか。ちゃんとこっちの口でも飲める準備できてんだろ」

「ち、ちが……っ♡♡ 俺……っ♡♡♡」

否定の言葉を重ねても、指先がそこに触れているだけで腰が逃げられない。

むしろ布を押し上げるように自分から擦りつけてしまっていた。

「そっちは……っ♡♡ だ、だめっ……♡♡♡」

腰をくねらせながら必死に否定するのに、大学生は全く手を止めなかった。

むしろ笑い声を零しながら、指先で布越しにじっとり濡れた部分をぐりぐりと擦ってくる。

「へえ……？　だめ、ねえ……。でもよ、どう見ても“だめ”には見えねえけどな」

「ひあっ♡♡♡　ち、ちが……っ♡♡　やあっ♡♡♡」

布の上から強く撫でられるたび、濡れ染みがじわじわ広がっていく。

自分でもわかる。ぐちゅぐちゅといやらしい音が布越しに鳴って、どれだけ濡れているかを容赦なく突きつけられてしまう。

「ほら、音聞こえるか？　ぐちゅぐちゅ鳴ってんの、これお前の汁だろ」

「ちがっ……♡♡　ちがうのっ♡♡♡」

「違わねえって。……クリ、ここだよな」

布の下に隠れている突起を探り当てられて、指先で小刻みに擦られる。

その瞬間、腰が勝手に跳ね上がった。

「んんっ♡♡♡　あっ♡♡♡　やっ♡♡　そこ……っ♡♡♡」

敏感すぎるクリが布越しに押しつぶされ、ぞわぞわとした甘い熱が下腹に弾ける。

何度もオナニーで触ってきた場所だからこそ、快感は分かっている。

でも今は自分じゃない他人の指で、それも強引に弄られている。

「ほら……ちょっと擦っただけで腰浮いちまう。ほんとにダメなのか？」

「ちが……っ♡♡　ほんとに……だめ……っ♡♡♡　んあっ♡♡♡」

「嘘つけ。ほら、クリこんなに硬くなってんじゃねえか」